

一般部門

靴音

なかいまさひろ
【奈良県・中井雅博】

一般部門
内館牧子賞

祖父は長い間、がんを患い、暑い夏の一週間、昏睡が続いたのち他界した。昏睡に陥ってからというもの、主治医は形式的に回診するといった感じだった。とにもかくにも僕は那一週間、ずっと病院で寝泊まりした。そして彼女はその病院の看護師だった。ある晩、暗い廊下の長椅子でうとうとしていると、リノリウムの床をコツコツと鳴らす靴音が近づいてきた。

祖父を受け持っている彼女は「風邪引くわよ」と声を掛けると、僕の横に腰を降ろした。非常灯だけがぼんやりとにじむ闇の中だった。「助からないと分かったら医者 hands を抜く?」。僕はそんな質問をしたと思う。彼女は言葉を選びつつ「手は抜かないと思うけど、患者さんから気持ちが悪くなることはあるかもしれない。でも看護師に絶対それはない」。彼女は続けて「ドクターは患者さんを治療する者、でも私たちは看護する者なの。私たちの根底にあるものは医学じゃない。だから心配しないで」

彼女はそう言って立ち上がると、もときた闇の中にゆっくりと吸い込まれていった。そこには靴音だけがいつまでも響いていた。

祖父が他界したとき、彼女は目を真っ赤にして僕らと一緒に涙を流した。そして彼女の最後の言葉は「お力になれなくて申し訳ございません」だった。僕はそのとき、彼女の言葉にうそはなかったと確信した。

広い世界には損得ぬきで他人に尽くす者がいる。彼女の根底に流れるものが何なのか、僕には知る由もない。彼女を突き動かすものが何なのか、僕には分からない。祖父は亡くなった。けれど、あの時僕は大切なことを教わったような気がする。本当の看護とは何なのか。医師は単なる治療者なのか。答えはまだ分からない。

僕は今、大学の医学部に学ぶ。彼女は人間としての僕の目標だ。いつか僕も医師として「心配しないで」と患者さんに言ってあげたい。靴音を聞くと今でも彼女のことを思い出す。